前世でフラれた男、悪徳な豚貴族の長男に転生しまして。

水源＋α

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

前世に好きな人に告白したが見事にフラれた男――伊藤祐介は車に轢かれて転生するという見事なまでの転生ムーブをして、悪名高い領主ボルドー＝アストリオンが当主であるアストリオン家の長男アレキスになってしまった。アレキスも父であるボルドーと同じくらいに悪名高く、愚かなドラ息子として領地内外からも有名だった。領民から高い税で年貢を巻き上げたり、犯罪に片足を踏み込んでしまっているような、所謂腐敗しかけている侯爵家と知ってから絶望するのだが……

目　次

プロローグ　フラれた男 ―― 1
侯爵家のスケベ豚長男になりました。 ―― 10

プロローグ　フラれた男

「――……ごめんね伊藤。私、実は……っ、好きな人が、いるの」

「……え」

それはとある日の放課後のこと。俺こと伊藤（いとう）　祐介（ゆうすけ）は中々踏み出せずにいた決意を固めて、前々から想いを寄せていたクラスメイトである安藤（あんどう）　奈津美（なつみ）に告白していた。

安藤と俺の関係は今日まで、友達関係だった。彼女と知り合ったのは入学してから三ヶ月経ち、俺がそろそろバイトを始めようかと家の近くのコンビニに面接に行った時だった。安藤は既にそのコンビニでバイトをしていたらしく、ちょうど俺が面接する日と彼女のパートの日が同じで、ばったりと出会ったと言う訳だ。最初は互いに話すこともなかったが、次第に自然と打ち解けていて、ただのバイト仲間という関係から、すぐに気の良い友達関係となったのだ。

安藤は可愛いかった。サイドテールの綺麗な黒髪で、今時のＪＫらしくいつも少し制服を着崩していた。流石に女優やアイドルに比べるとだが、時折見せてくれる人懐っこい笑顔のお陰で、俺としてはすごく接しやすかった。性格は失礼だが、気が強い方だとは思う。しかし、同時に彼女に妹がいるせいなのか、なんだかんだ言いつつも世話を焼いてくれる。照れ臭そうで不器用な優しさでいつも俺を助けてくれた。

彼女のことを好きになった時期はわからない。ただ一緒に過ごしている内に意識するようになってから、いつの間にか彼女に恋をしていた。

特に今年、同じクラスメイトになってからは一層意識した。

「……」

しかし、結果は見ての通り振られてしまった。

高校に入学して一年生の頃から、三年生になった今までの長い間実らせていた、安藤への好きな気持ち。本人から直々に今、その想いの

丈を断られた事実が暫くの間、頭の中を反芻する。
そして気が付けば、もう何がなんだか分からない状態に陥っていた。胸は張り裂けそうで、喉の奥からは思わず嗚咽が漏れ出しそうだった。訳もわからず、ふと気を抜いてしまえば、この眦からも涙が溢れ出しそうで。
「……っ」
しかし、ここで取り乱したらそれこそ安藤に迷惑をかけてしまうし、何より女々しい男は格好悪いだろう。だから俺は、腹の奥底から湧き上がってくる複雑に絡まり合った様々な感情を抑え込み、努めて笑顔で返答した。
「……そ、そう、なのか」
「っ……うん」
俺はちゃんと安藤の顔を見て笑えているだろうか。
いや、恐らくは笑えてないだろう。何せ、目の前の彼女の顔を見れば分かる。その表情はとても苦しそうで、如何にも俺に罪悪感を向けているのが分かる、そんなものだった。
情けねえ……
自分から告白しといて、相手に気を遣わせて。自分が本当に情けなく思えてきてしまう。
その気持ちが先行したのか、今すぐこの場から逃げ出したかった。
だから俺はさり気なく涙を指で拭って、バツが悪そうな顔をしている安藤に次はちゃんとした笑顔を向けた。
「……悪いな。態々呼び出して。安藤の恋、っ……お、俺、応援するからさ。あ、そろそろ時間だな！　あーあ、早くバイト行かねえと遅れちまうし。先に行っとくな。また……あとのバイトでなっ！」
俺は矢継ぎ早に言葉を捲し立てて、足早に校舎裏から立ち去り、彼女の視界の死角に入ったところで――全力で下駄箱へと走り出していた。今まで俺が積み上げてきた想いが、胸中で崩れ去っていく音を掻き消すように、一心不乱に腕を振り、足を踏み出す。
「――ッ……待って伊藤！」
立ち去る際に聞こえてきたはずのあの子の声も、置き去りにして。

◆◆◆

バイト先であるコンビニまで、俺はとぼとぼと歩いていた。普段はちらっと見てしまう行き交う車には目もくれずに、ただ呆然としたまま、分かりやすくも頭を地面に向けて落ち込ませている。さっきからすれ違う歩行者たちにも時には不審そうな、そして時には心配そうな視線を向けられていた。

「……はぁ」

このままバイトに行きたくねえなぁ……

思わず嘆息する。

何せ安藤と同じバイト先だ。あんな別れ方をしてしまった手前、またこの後バイト先でばったり出会うのは気まず過ぎるし、何よりまた逃げ出しそうだった。

いっそのこと今日は体調不良ということにして休んでしまおうか。

と、そんなことを考えながら、出来るだけバイト先には着きたくない衝動なのか、普段よりゆっくりな速度で歩いてると目の先に児童公園が見えてきたのだが――

「お、あそこにいるのは」

何やら見覚えのある姿に目を細める。

「……げっ、安藤の妹じゃねえか」

そこで小休憩を取っている3人組の中に、安藤の妹である今年で中学二年生になる銘花(めいか)ちゃんを発見した。いつもは気楽に声をかけて挨拶をするところだが

「……今、会いづらい」

そう。今さっきその銘花ちゃんの姉である安藤にフラれたばかり。未だに心の整理も全くついてない中で挨拶するのも忍びない。というか、俺があなたの姉に先程フラれましたと突然言われたらパニック

起こすだろうし。
「ここは大人しくスルーするとし――」
「――お兄さんじゃん。そこで何してるの」
「うわぅ!?」
「うわ！　びっくりしたぁ……いきなり変な声出さないでよ」
　突然声をかけられて逆にパニックを起こしそうになる。恐ろしいことにこの子は気付かぬ内に俺の隣に来ていたようだ。クノイチかよ。
「あ、ああ悪い。じゃ、そういうことでな」
　さり気なく可及的速やかに逃げようとすると直ぐに腕を掴んで引き戻された。
「いやいやいや。お兄さん早い、早いって」
「……え？」
「いやこっちがえ？　だよ。なんで逃げようとするのさ。どうかしたの？」
「そ、それよりも友達はいいの？」
「もう帰ったよ」
　いつの間に帰ったんだ。もしかして俺が黙考してたあの一瞬で『じゃあねー』と別れを取り付けたのかこの子は。
「お兄さん。私が聞きたいのは、わかりやすく変な今日のお兄さんに何があったのか知りたいだけだよ」
「わ、分かりやすく……」
　そんな挙動不審だっただろうか……しかし、隠していてもしょうがないか。
　と、俺は意を決して口を開く。
「……実はさ」
「うん」
「これからバイト行くんだよね。だから急がないと」
「ふーん」
「……じゃ」
「いやいやいや」

逃走を図ろうとしてもどうしてもまた腕を掴まれて引き戻される。いや、振り払えば良いと思うが流石に悪いし。好きな人の妹であるため丁重に扱ってしまう。

先程からやはり不審な行動をしてる俺に銘花ちゃんは目を細めて

「お兄さん。この際だからはっきりと言うね……」

「え、なんだよ」

「……お姉ちゃん絡みでしょ」

「……いやっ？」

「はぁ……で、お姉ちゃんと何があったの」

「あ、決めつけられちゃった」

もう言い逃れは出来ないらしい。ここは素直に、『俺、今さっき君のお姉ちゃんにフラれちゃいました！』と言わなければ。

「……本当のこと言うと」

「本当のこと言うと？」

「……ふ、フラれ、ました」

「……」

あら、銘花ちゃんフリーズしちゃったわ。どうしましょう。

「え？　フラれた？」

「……あ、ああ」

「……ＨＡＨＡ、面白いジョークだね」

「いやジョークじゃねえよ本当だよ。てか本人に言わせんなよ悲しくなるだろうが！」

「あ、ご、ごめん。まさか……ええ、お姉ちゃんどう言うことなの」

「……こっちが聞きたいくらいだよ。はあ、ったく」

なんか銘花ちゃんに暴露したら少し気が軽くなった気がするし、もう今日はサボって帰るか。

「お兄さん。まあ……その。ど、ドンマイ」

「うわーうぜぇ……」

「な、なんでさ！」

そんな笑顔で言われてもそう思うに決まってんだろ。

なんだか馬鹿らしくなってきたため、俺は踵を返して歩き始める。

「ちょ、待ってよお兄さん。ごめん悪かったから」
「あーいいよ。気にしとらん。俺のことは良いからさっさと帰りな」
「いやでもそう言うわけにはいかないというかー」
「なんで銘花ちゃんまで罪悪感感じてんだよ。伝染すんのかこのフラれたムードは。じゃあな銘花ちゃん」
「いや、その。と、取り敢えず今日は家まで送ってよ。話はこれからでいいから」
「いやだよ。また会ったら気まずいだろ。というか……多分これからあいつとも交流が無くなるだろうし、お前も無理して俺に付き合わなくても良いんだぞ」
「そ、そんな釣れないこと言わないでよ」
　その後もそんなやり取りは公園を出た後にも続き、銘花ちゃんが後ろからピーチクパーチク言いながら付いてくる。
「まあ、こ、今回のはツイてなかったんだよ。あのお姉ちゃんって素直じゃないし、次にまた告白すれば絶対に付き合えるって！　だから今から会いに行こうよお兄さん。傷が深まらない内に！」
「……っ」
　なんだか今の精神状態だと、何を言われてもイラっと来てしまう。そのせいか、中々付いてくるのをやめない銘花ちゃんに腹が立って来てしまい――

「――鬱陶しんだよッ！」

　と、カッときてしまった。
「……っ！」
　初めて銘花ちゃんに強めの言葉を言ってしまったせいか、明らかに動揺したと同時に、顔を俯かせた。
「……ぁ」
「……ッ!!」

　流石に言い過ぎたのを後悔したが、時は遅く。銘花ちゃんは涙を溜

まらせた眦からこちらを悲しそうな視線を向けると、次の瞬間走り去って行ってしまった。
俺は最低だ。鬱憤がいくら溜まってたって好きな人の妹に当たってしまうなんて。
後悔は先立たず、俺も堪らず彼女が走り去って行った方へ走り出した。心配だったのもあるが、一番は真っ先に謝りたかった。
それから３０分経っただろうか。汗だくでびしょびしょになったワイシャツにイラつきながら、銘花ちゃんを探し回っていると――

「……あ」
いた。やっと見つけた！
銘花ちゃんが、先程のフラれたばかりの俺のようにとぼとぼと歩道を歩いている後ろ姿を視認すると同時に安心する。
もう時間は遅いし、とにかく犯罪に巻き込まれてなくて良かった。
今はもう６時頃。冬という季節柄、すっかり辺りは暗くなっていた。
俺は安全のためにスマホのライトで照らしながら、横断歩道を渡ろうとしてる銘花ちゃんの背中に声をかけようとした瞬間――曲がり角に建てられているミラーに車が走って来ているのが映っていた。しかも、銘花ちゃんは死角から車が来ていることに気づいてなさそうだった。
「――い、伊藤!?　何してんのよ！　探したよ！」
「っ!?」
そこで、なんて神様は気まぐれなんだと、その時は思った。こんな危機一髪という時に、安藤が告白に失敗した俺を心配してくれて探しに来てくれていたらしい。なんだ。探されていたのは俺の方だったのか。
俺と同じように走ってきたせいか、肩で息をして汗を拭っている安藤を尻目に、俺は直ぐ様前を見据えた。
残念ながら今、目の前で女の子に危険が迫っているのだ。俺は目の前のことで精一杯で、態々心配をかけてしまったことを、彼女に謝る

ことは叶わない。でも――
「――ッ！　馬鹿野郎！　銘花ぁッ！」
「……え？」
――これで許してくれるか。安藤
後ろの俺から大声で叫ばれた彼女は何事かと惚けて振り返ってくる。彼女の右側からは既に車が迫って来ていた。車も曲がり角から目の前に出てきた彼女に今頃気付いたようで、慌ててブレーキを踏む音が聞こえた。
たった数秒間。されど俺には、今のこの数秒がとても長く感じた。自分の判断が目の前の命の行く末を左右しているのだ。
必死に動かしているこの足に。
必死に伸ばしているこの手に。
必死に名を叫ぶこの俺に。
銘花ちゃんの命が重くのしかかる。
目の前の彼女と自分の距離は届くか届かないか微妙な位置だった。最良なのは、自分は負傷するが彼女を抱いて跳びこんで回避すること。しかしそれは無理だと判断した俺は、精一杯に両手を伸ばして彼女を全力で押し出した。
後ろから思い切り押し出され、銘花ちゃんは前に倒れ込んでしまう。怪我は免れないだろうが、その命は助けられた。
安堵する。しかし無情にも、時は止まってくれない。
「――お兄さぁん!!」
「――祐介ぇ！」

次の瞬間、とても大きな衝突音とともに、強烈な痛みが全身を駆け巡った。全身のさまざまな骨が折れていき、終いには臓器に突き刺さるのを自覚した。
俺は飛んでいた。思い切り空中で車に横からぶつけられたせいだろうか。徐々に高度が下がっていくのをスローモーションに感じながら、俺は上空から二人の姉妹の表情を見ていた。

文字通りのぐしゃぐしゃな顔だった。銘花ちゃんに至っては鼻水までターザンさせている。

ぷ、ふっ……だっせ、え

安藤も酷い顔をしていた。今にも泣き出しそうな表情だ。あんな顔、今の瞬間まで見たことが無い。思えば、俺はまだ安藤のほとんどを知らないままだ。俺が変に奥手なせいで、彼女と二年半近く過ごしたくせに、あまり深い交流を重ねてこなかった。今更後悔しても遅いか。

あぁ……あ。付き合いたかったなぁ

嗚呼。安藤の好きな奴はどんな男だったんだろうなぁ……きっとモデルみたいに足が長くて、さぞイケメンなんだろうな。あいつは普通にモテてたし、やっぱり俺は……不釣り合いだったか。

走馬灯のように彼女と過ごした温か過ぎる記憶たちが流れていく。死ぬ前だというのに、何故か痛覚よりも心地良さが勝った。家族との思い出も光り輝いていて、何気ない日常風景も宝物のように思えて。なにより、安藤の笑顔。そして、銘花ちゃんの笑顔。俺の人生を彩ってくれた二人の顔が――

そんな時間もとうとう終わりを告げる。やがて頭から地面に思い切り落ちて、また何かの骨が何本も折れる生々しい音を聞いた。

辺りに響くのは騒然とする人々の声たちと、喧しいクラクション――そして、誰かが泣き叫ぶ声が聞こえた。

あんど、う。お、れはやっぱりお前の、こ――

――――――

……俺は死んだ、のか？

人生で体験したこともないような死ぬくらいの痛み――実際に死んでしまったのだが、そんな痛みが全身に駆け巡ったその時に、俺は確かに意識を、命を亡くしたはずだ。

突然だが、死ぬ前までは死後の世界とか、天国や地獄という存在を全く信じてなかった。死んだのなら自分という意識は消えるわけで、その意識だけが体と乖離する現象なんて起こり得るはずがないと考えていた。

――しかし、事実。俺は死んだはずなのにまだ、伊藤祐介という自意識が未だに存在している。こうして、このようなことを考えられているのも不思議に思えてくる。

当然ながら言葉は発せられないようだ。何せ、身体という実体が無いからだ。側から見たら俺は心霊番組でよく見かけるオーブみたいになってそうだ。

にわかに信じられないが……じゃあこの暗闇の世界は一体どういうところなんだ。

死後の世界、ということだろうか。

光が一切なく、一面が暗く闇に染まっている。文字通りに何も見えない状態だが、何故か奥行きを気配で感じてしまう

ような、不思議で不気味な世界だった。

……もしかして、俺はずっとこのままか。

この光もなく、何もない世界でずっと過ごしていくのかとこれからのことを考えると、頭がおかしくなりそうだ。生き甲斐もなく、身体

さえもないのに、五感も感じられない俺は、この先どうやって自我を保って過ごしていけばいいんだ。
神様がいるんだったら早くこんな惨めな俺を消滅させてくれ……
もしかして、この世界こそが、生前で聞いていた地獄なのだろうか。ここが本当に地獄だとしたら納得してしまう。もう既に頭がおかしくなりそうだからだ。自分一人だけの世界。聞こえは良いが、話し相手も居ないのだ。このままでは確実に廃人ルート確定だろう。
と、そんな時だった。

――起……て、下……
内心、飛び上がるほどに驚いた。このままこんな世界で孤独に過ごしていくのだろうと諦観していた矢先、出どころは不明なのだが、誰かの声が聞こえてきたのだから。
生前ならば誰か知らない人の声なんて気にも留めなかっただろうが、状況が状況だ。
事実、孤独感に打ちひしがれそうな今の自分には、知らない人の声を聞いただけでも安心感を得てしまうほど、心はボロボロだった。

心半ばで死んでしまったので、それはもう未練なんてタラタラだ。これからも生きていたかった。告白のことについてはしょうがないと思っている。安藤に好きな人がいるのであれば、俺はきっとこれからも関わることはしないにせよ、きっと陰ながら応援した。勿論、文句はいっぱいあるが、それ以上に安藤は大切な人だ。だから最後まで幸せに暮らしている安藤の人生を見届け、俺も新しく生まれ変わるつもりだった。
いつも元気をくれた銘花ちゃんの存在も、今にして思えば本当に大きな存在だったんだなとやっと気付けた。多少の鬱陶しさはあれど、あの快活さになんども救われてきたのは事実だ。

死ぬ前、銘花ちゃんは俺を励まそうとしてくれた。ウザったく思ってしまったのは俺の中にあるフラれても諦めきれない女々しいプライドが表面化してしまったからだ。そういえば俺、あいつに謝ったっけ。……出来れば謝ってから死にたかった。

他にも沢山未練がある。諦めたくない気持ちがある。このまま易々と死んでたまるかと。しかし、こんな世界でずっと生きていたとしても何も意味がない。だから、突然聞こえてきた声に、俺の中にある生きることに諦めきれない心が光を見出したのだ。

しかし、肝心の何を言っているのかがわからない。回線が悪い時の電話みたく、所々言葉が途切れてしまっている。

耳は無いが、耳を澄ますように集中していると――なんだか突然、俺の意識が上に吸い上げられるような感覚を覚える。

……これ、もしかして成仏するんじ――

◆◆◆

「――まだ消えたく無いッ！」

「「っ!?」」

思わず、深い微睡みから覚醒し、その身を飛び起こさせる。

「はあ……はあ――」

なんだか怠い感覚と、何故か息を切らしてしまっている俺自身に鬱陶しさを覚えながら黙考した。

まだ成仏したくない。俺が経験してきた記憶（たから）をそう易々と――

……ん？

え？　……飛び、起きる？　怠い？　息切れ……？

死んでいる筈の俺が感じるはずがないのに、今こうして実感している様々な感覚に、そういえばと怪訝になる。

それに、尻がフカフカ……ってベッドか？　というか……え？　なんで俺のベッドを取り囲むようにメイド服とか燕尾服着てる人が……？

「い、いや、そんなことより……！」

思わず、自分の身体のあらゆる所を凄い勢いで触って確かめてしまう。

「……え、え？　か、らだ？」

うん。ある。確かにさわれる。俺の身体……身体がある！　いや、でも何でだ？　俺は確かに死んだはずだ。

だが確かに今は夢では無いし、現実だと断言できるほど、窓から差し込む日の光も、この部屋の匂いも、何もかもが現実的だった。意識も冴えているため、これが幻覚というわけではなさそうだ。

正直に言って安堵する。あのまま無機質過ぎる暗い世界で永遠に過ごすと思っていたからだ。

「……？」

というか……誰だこの身体。この腹回りにたっぷりついている脂肪が謎だ。俺こんなに太ってなかったぞ。もしかして事故後に助かって、何年もの間寝たきりだから太ったとか？　逆に痩せ細ると思うのだが。

別人になったような自分の身体の急激な変化に首を傾げていると、今まで奇行とも言える俺の行動に呆気に取られていた人たちの中から代表して、如何にもな初老の執事さんが話しかけてきた。

「あ、あの。アレキス様……お身体は大丈夫でしょうか」

「え？　あ、ああ。えと、大丈夫……です。それより、初めまして……ですよね？」

「……はい？」

返答した後に明らかな怪訝な表情を途端に見せた執事さんに、思わず焦る。

「……え、あの。俺、じゃなくて私、何か変なこと言いましたか」

「「……」」

少し上擦ってしまいながら言うと、執事さんだけでなく、控えてい

るメイド服のコスプレをしたお姉さんたちまでもが、本当に驚いた様子で瞠目させていた。いやコスプレにしてはなんだか機能性を重視したメイド服だな。妙な露出がない。

「……え？」

年上の大人たちのそのような反応に、俺も少々困惑する。

いや、しかし初めましてだよな。俺この人たちのこと知らないし。というか、さっきからアレキス様って言われてるけど……もしかして俺のことか？　俺にはちゃんとした名前……あれっ、俺の名前って……

混乱しているせいか、何故か生前の頃の自分の名前が咄嗟に思い出せなかった。しかも自分の本能的な部分が、アレキスと呼ばれたがっている気がした。どういうことだ。自分が自分でないみたいだ。

いやそれよりも少し落ち着いて、今のことを考えよう。状況的にこれは車との衝突事故の後、大怪我した俺を看病してくれたのだろう。実際に、今の俺の頭には包帯が巻かれている。

しかし身体の方にはあまり処置が施されてないような気がする。俺は確かに車に思い切りぶつかって全身を強く打撲した筈だ。体内の骨も無慈悲に何本も折れていく音も聞こえた。血反吐も吐きまくった。明らかに生死を彷徨うくらいの重症者だったと思うのだが……頭だけに包帯の処置をされている。どういうことだ。俺の身体は再生でもしたのか。

「……うわぁ」

そこまで考えて、今更部屋を見渡してみたのだが、明らかに病院の病室ではない。点滴も無ければナースコールなどの機器もない。どちらかといえばレトロな高級ホテルのスイートルームに近い、随分と豪勢な部屋だ。

こんな設備で、どうやってあそこまで重症だった俺をここまで回復させたんだ？

部屋を物珍しそうに見渡し始める俺に、咳払いが聞こえてくる。どうやら初老な執事さんが話すようだ。

「……一先ず、命に別状が無ければ安心です。ですが、どうやらまだ意

識が定まってないご様子ですので、僭越ながら私がこれまでの単的な経緯を説明致しましょう。アレキス様は七日前の朝、不注意で階段から転ばれて、特に頭を強く打ってしまい、今日まで気を失っていたのです。七日ぶりの今朝、お目覚めになられたので、その影響かは存じ上げませんが、恐らく一時的に記憶が混同しているのだと思います。先程は失礼致しました。七日ぶりに目が覚めれば、誰であろうと混乱状態に陥るというのに、突然不用意に話しかけてしまったこと、誠に申し訳ありませんでした。補足として、私の名はターナー＝サトローク と申します。長年、アストリオン家に仕え続けて、今はこの家に仕えている者たちのまとめ役を任されております。思い出して頂けましたか」

「……は、はぁ」

あれ……？　事故から助けてくれたんじゃないのか？　階段から落ちた……って、全く記憶にないぞ。

恭しく頭を下げながら、自分より明らかに歳上で聡明であろう執事さんがそう言ってきて、浮かんでくる疑問にふと首を傾げる。なんだか歳上からここまで敬られると、むず痒い感覚がする俺も咄嗟に挨拶を返す。

「あ、これはご丁寧に。えっと、俺……あ、いや。私は……アレキスと言います。ターナーさん」

やはり自分でアレキスと名乗ることへの違和感が半端ない。身に覚えのない筈なのに、自分の名前だと勝手に認識してしまっている。本当に訳がわからない。もしかして死んだ後に神か誰かに記憶を刷り込まれたのか。というかやはり俺は死んで、ここは死後の世界なのだろうか、本当に訳が分からない。

自分の名前でさえ怪しい俺の言葉に、ターナーさんは折っていた腰を戻して

「……正しくは、アレキス＝ルークス＝アストリオンです」

と、親切に俺の名前（？）を教えてくれる。

……ミドルネームってなんだか貴族っぽいな。

「あ、ありがとうございます」

「……」
そんなおぼつかない俺に、ターナーさんは何かを察したようにハッとした後、次には「アレキス様。差し出がましいのですが、いくつか質問してもよろしいでしょうか？」と真剣な表情で尋ねてきたので、気迫に押されて直様頷く。だって怖かったんだもん。
「最初に、今の年暦を教えてください」
「え、えーっと……」
……確か世暦２０２０年だったよな。
「……西暦２０２０年です、よね？」
「「……？」」
多少の自信がありながら問いかけると、周りのメイドさんたちはなんだか微妙な反応を見せる。中には困惑しながら耳打ちしている人もいた。どうやら間違っていたらしい。そんな中、当の執事さんの表情は動じていないのか眉一つ動かさずに答えてくれた。
「現在は聖王歴６７１年でございます」
「……は？」
聖王歴？　なにそれ？　ゲームの話か？
「どうやら……ここまで聞いた限りでは、アレキス様の記憶の損傷が予想以上に深刻です。少々心配になってきました。当主様、奥方様の名前は如何でしょうか」
当主って言ったら父親のことだよな。
「……？　えっと、ボ、ルドーとクレシ、ア？」
「なるほど。そこは覚えていましたか」
と、そこで彼は一旦思案するようだ。
一先ず、この訳の分からない状況ではこの人の言う通りにしておけば大丈夫だろう。

さて。多分ターナーさんは今、俺の記憶がどれだけ損傷してしまっているのかを確認してくれているようだ。因みに両親の名前を聞かれて、咄嗟に出てきた父であるボルドーと母のクレシアの名前。これも本当に違和感しかない。本当の両親の名前が思い出せない悔しさ

が募る。
　そこまで考えていたら、執事さんが考えが纏まったのか、こちらに目を向けてきたので、俺も応じる。
「アレキス様」
「は、はい」
「先ずはもう一日だけ様子を見て、明日の朝、また同じような形で私がアレキス様に質問をして、記憶に回復の兆しがありそうなのかを確認させていただきたく……」
「は、はい。大丈夫、です」
「……少し無礼を承知で申し上げますが、以前のアレキス様は私たちみたいな給仕に敬語なんて一切使わないお方でした。しかし今のあなたは……まるで別人のようなお方ですね」
「……！」
　ターナーさんの言葉を聞いた瞬間、今の訳の分からない状況に一つ、ある仮説が脳裏を過った。
　以前の、アレキス様。身に覚えのない俺の名前や両親の名前。それに、俺を主人のように扱う給仕たち……え、まさかこれって
「あ、あの！　俺って……あ、アレキスって、過去の私はどんな人だったんですか!?」
　食い気味に少し身を乗り出して聞いてくる俺に、聞かれた本人であるターナーさんは少し目を見開いた後、粛々と告げてくる。
「……アレキス様はアストリオン侯爵家の長男であり、次期家督継承権の最有力候補です。今年で成人され、晴れて十五歳となり数ヶ月後には王立学園に特待生としての入学を控えています」
「……え」

　……つまり、俺はアレキスってやつの身体の意識に転生してしまったっていうこと、なのか。
　とても驚くことだろうが、なんだか驚きすぎて逆に冷静になってく

る……訳がねえ！　なんで死んで……おまけに他人に成り代わった先が侯爵家の長男なんだよ！　荷が重すぎだろ！　礼儀作法とか知らねえぞ！

……あれ、じゃあ俺が成り代わってしまったアレキスってやつはどんなやつだったんだ。

この身体の元持ち主の世間的な評価によって、俺がこの先どう生きていくのか決まってくるだろう。

「……人としてはどんな感じだったんでしょうか」

実は俺は、先程の執事さんの言い回しや、周りのよそよそしさから最悪なパターンを予測していた。それは――

「……本当に宜しいのですか？」

「お願いします」

「ですが……」

「では命令です。この場の誰でも良いので、私が気を失う前にどんなことをしていたのか答えてください」

こうでもしないとこの人たちは喋らなそうだ。なんせ、視線でわかる。執事さんからはそれほどでもないが、他の給仕の人たち、特にメイドさんたちからは忌避されているようなものを感じる。恐らく、俺がこの身体に成り代わる前のアレキスってやつは相当やんちゃしていたのだろう。

だって鈍感な俺でも一目で分かるくらいに明らかな苦手意識を持たれている目をしているのだ。

命令とあらば、給仕たちはどうすることも出来ない。こたえるしかないのだ。

やがて、ポツりとひとりのメイドさんが零した。

「……私はアレキス様に……その。私のお尻を……通り過ぎる間に触られました」

「……」

はい。もう終わりです。

もうのっけから救いようのないエロガキだったのが分かったよアレキスくん。俺は一体これからどう生きれば良いんだ。一生メイド

さんのお尻を触った侯爵家の長男って嘲笑われるのか。
「わ、私は……胸を触られました」
「……」
もうね。言葉に出来ないよ。俺自身に罪がないのに、まさかこのアレキスというエロガキの身体がしでかした罪を俺は一緒に背負わないといけないだなんて……
「……二人のお名前は？」
「け、ケシー＝リオルと申します」
「……ナシュリー＝コールマンです」
「……マジか」
思わず、起こしていた身体を倒してしまう。
起きてからの情報量が多すぎる。生きていたかったのに死んで、貴族に成り代わって、しかもその身体の元所有者のアレキスってやつは侯爵家長男の権力でメイドにセクハラなどのやりたい放題していたドラ息子で……挙げ句には腐敗してる暴虐な当主がいる家で。
取り敢えずだ。先ずは目の前のことに集中しなければ。
……俺がやらかした訳じゃないのに、なんでセクハラしてしまったことに対しての心労を感じなければならないんだ。
「あ、アレキス様！　大丈夫ですか」
「だ、大丈夫です」
とはいえ、恥ずかしい気持ちを抑えながら、前に出てきて進言してくれたケシーさん、ナシュリーさんにこのままでは申し訳が立たない。再び身を起こして、咄嗟にベッドの上で土下座をした。
「……その、記憶を失う前とはいえ、本当に申し訳ありませんでした。まさか私が二人にそんなことをしていたなんて……」
「――！」
侯爵家の長男らしからぬまさかの土下座に、周囲のメイドたちや執事さんも驚愕する。
「い、いえっ！　頭を上げてくださいアレキス様！」
「分かって頂けただけでも私は幸いです！　ですから、どうか頭をお上げください！」

そして、頭を下げられた当のケシー、ナシュリーに至っては内心驚愕と恐怖に襲われていた。こんなところを当主であるボルドーに見られたら不敬罪になってしまうのではないかと気が気でなかったので、必死に宥めているのだ。

さらに、今までのアレキスの傲慢で怠慢な性格を目にしてきたからこそ、記憶喪失でこれほどまでに人が変わっていることに、言いようのない違和感も覚えているようだった。

俺も起きてから執事さんやメイドさんたちに話をしてもらったお陰か、時間が経つにつれ、アレキスがこれまでどのような振る舞いをしていたのか、当時の本人が体験して来た記憶が蘇ってきたのだ。

記憶の内容は酷いものだ。気に入らなければ直ぐに当主であるボルドーに報告して、その要因となってしまった給仕の人を解雇させたり。しかも、夕食前にキッチンへ忍び込み気に入った食料があれば盗んでいたり。侯爵家が主催するパーティーでは、子爵家などの子息たちに声をかけて徒党を組み、これまた気に入らない他の家の子息が居れば、寄ってたかって影で虐めていたりなど。

もう良くある悪役の子供時代がやる典型的なことの殆どをやってしまっているような子だった。ある意味で、悪役の能力に関して言えば優秀な子だったようだ。ざけんな。

「で、でも、私が……」

脳内で徐々に以前のアレキスの記憶の中にある、数々の悪事がフラッシュバックしていく度に、当事者でもないのに俺の心は何故か、罪悪感に支配されていった。

本当に、なんてことしてくれたんだ。アレキスは……

しかし、俺がこのまま成り代わっていなければ、将来的には順当に侯爵家の暴君と化していたはずだ。

そう考えると、先程まで特に心につっかかり、尾引いていたアレキスに対する申し訳なさ。俺が身体の支配権を奪ってしまったことへの罪悪感などの感情がいくらかマシなってきた。とは言っても、これから評価最底辺の男の身体でどう行動していけば良いのか見当が付かない。

にしても、本人でもないのに、俺が記憶を思い出しただけで、ここまで共感性羞恥を味わうとかどれだけのことをやらかしてきたんだ。

しかも――

「もういいのです！　アレキス様！」

「お顔を上げて下さい！」

「ま、まさか……ほ、本当に記憶喪失に？」

「こんな……えっ」

俺が土下座をしただけでこの慌てようだ。確かに仕える主人が土下座したら誰だって驚いて、動揺するはずなのだが、今のこの状況に至っては明らかにその範疇を超えていた。この部屋にいるみんながみんな動揺し過ぎてしどろもどろになってしまっている。これだけでも、日頃から相当給仕たちから恐れられ、内心嫌われているのが分かる。

これは当分、会話も上手く出来なさそうだ。

「あ、えっと……」

俺が声を掛けようとすると、給仕の男の人の声に遮られた。

「このままアレキス様が記憶喪失になってしまったボルドー様の耳に入れば……」

「で、でも記憶喪失じゃないかもしれないだろ！」

「バカ！　あのアレキス様が俺たちみたいな給仕に頭を下げるか!?」

「いくらアレキス様の不注意とはいえ、仕える私たちが注意を怠ったのは事実。その時は、最悪わ、私たちの首が……」

「そ、そんなぁっ……」

既に俺が土下座の体勢から身を正したことには気づかないのか、今もなお給仕たちはこれからの処遇のことが気になり過ぎるのか、話に夢中だ。確かに気持ちは分かる。段々と取り戻しつつあるアレキスの記憶によれば、ここにいる給仕たちはボルドーから俺に仕えるように任された人達だ。身の回りの世話は勿論のことだが、いくら長男とは言えども、まだ俺は子供であるため、ふとした些細なことでも怪我をしてしまう確率が高い。さらに自分で言うのもなんだが、困ったことかこの太った身体のせいでさらに怪我する確率が高い。だから、俺

に仕える給仕たちは身の回りの危険を、常に抑えておくことが要務でもあったのだ。
しかし、アレキスが階段から落ちて頭を強く打ってしまった拍子に別人格である俺が成り代わってしまったことで、本当は記憶喪失ではないのだが、俺が記憶喪失に近い状態になってしまったのだ。
この事態は重く受け止められて、あの豚親父……ボルドーはきっとこの人たちをクビに。いや、或いはその場で……
最悪なシナリオが頭に思い浮かぶ。自分のせいではないが、俺がアレキスになってしまった以上、この人たちを守らなければならないだろう。
ここは俺が場を収めないといけない。
そう思い立ち、口を開こうとすると

「――……アレキス様の前だぞ！」
「「――！」」
「！」
と、俺が言う前に、先程までの静かな印象を受けたターナーさんが、威厳が有り余る声で、騒いでいた給仕たちを叱った。
俺も思わずビクンと身体が少し跳ね上がるくらい、迫力あるものだった。これが、長年執事の仕事を全うして来た経験から形成される威厳というものなのだろう。給仕たちも俺と同じように口を一挙に閉じて、再び即一列に並んだ。
「……申し訳ありませんアレキス様。私の教育が成ってないばかりに」
「「……申し訳ありませんでした」」
「……い、いえ。こちらこそ。謝るためとは言え、土下座は少しやり過ぎたなと……未熟者ですみません」
こういう時、正しい敬語の受け答えで話せないのが辛いところだ。何せまだ精神年齢も高校生で、仕事もしたことがない。これから学んでいくとは思うのだが、ついていけるか心配だ。
と、そんなことは置いておいて。確かに仕える主人からの土下座は

給仕たちからしたら困るだけだったし、一連の騒ぎも俺の言動に原因があった。ここは俺も謝らないといけないだろう。
こちらの言葉に、一同はまた驚いたようで瞠目してくる。そんなに一々驚かれてたらむず痒いです。
「……やはり、別人のようです」
感慨深げにターナーさんは呟いたので、多分折り合いは付けられたのだろう。先程までのてんやわんやしていた状況も、一段落したみたいで、内心ほっとする。
「あ、あの。取り敢えず、今日はこのくらいにして明日にまたじっくりと話しませんか？　考え事をしたいので」
それに、早く一人になりたかった手前もあった。何せ死んで貴族の長男の身体と成り代わった今の状況を、頭では辛うじて理解出来たものの、精神的には全く追いついていなかったのだ。
ターナーさんも「分かりました。何かあれば、外にいる者にお申し付け下さい」と素直に聴いてくれた。
「ありがとうございます」
そうして、ぞろぞろと10人くらいは居た俺の部屋からターナーさんたちが後にする背中を見届けた後、静かになった部屋で俺は呆然と呟くのだった。

「……先ずは痩せるか」